

武庫川流域委員会
委員長 松本誠様

委員 酒井秀幸

意見書

[武庫川の社会環境の議論を]

1997、河川法の改正によって治水利水に加えて環境への配慮と地域自治体の参画という新しい川づくりの在り方が示された。概念として環境とは自然環境ととらえて武庫川整備計画においても環境アセスメントと実施して良好な環境づくりを整備計画に盛り込むべく議論が続いている。

しかし、私は自然環境一辺倒で環境問題を片づけてよいものだろうかという疑義を持ち続けている。

太古の昔より綿々と続いてきた川と人間のくらしと密接不可分な関係を検証し将来にむけてどのように構築してゆくか、という所謂川の社会環境問題を無視して整備計画を策定することは片手落ちであると思うのである。

近年急速な経済成長はあらゆる方策をたてる時合理的効率的であることが施策のベースにあり河川改修も先ず治水に重点を置き降雨を一刻も早く海へ運ぶのが川の役目であるという観点から効率の良い流下能力の高い川づくりこそ川の使命とばかり蛇行している川を直線化し井堰を障害物として撤去、河床を平坦にして瀬も淵もなく何の変哲もないまるで運河のような川に整備改修されて川の様相は一変した。

その功罪については様々な評価があるが河川の社会環境面からその実体を見ると、失ったものは決して小さくない。

農民が遠い先祖から受け継いできた伝承技術は自然に負荷をかけず理に叶った技法で井堰を築いて川の水を引き天恵の灌漑用水で米を作ってきたのである。また適切な場所を選んで築いた井堰は床止土の役を果たし、水の漏れる箇所は格好の魚道でもあった。しかし近代河川工法は井堰を障害物として撤去し、流水を堤外に溜めてポンプ揚水で水稻の灌漑をするようになり生産コストは益々高くなった。

このように近代河川工法は川の社会環境にも大きな影響を与えたのであるが、最も懸念されることは流域住民の川に対する心情の稀薄である。伝統の稲作文化は流域をひとつの共同体として相互扶助の絆で地域社会のコミュニケーションが保たれてきたが、経済優先の近代化の波をかぶってから地域の連帯思想が消えつつあり川の恩恵など意識することも遠い昔話の様になった。

いみじくも今日の川の姿が現在の世相を反映しているという。モラルの

低下した社会は川にゴミを捨てる人が後を絶たない。そして川で遊ぶ子どもの姿が川から消えた。自然が子どもを強くするというが子どもと川の相性の良さは絶妙である。残念ながら今日の川は「良い子は川で遊ばない」と子どもを寄せつけない川の姿は悲しい。これはひとり管理者の責任を問うものではないが経済至上主義の現在社会のツケを川がかぶっていると思うのである。

このように川という自然を大局的とらえ川の社会環境の保全と創造という議論が欠かせない。環境問題は自然環境と両面から論じてこそ市民の納得のいく環境政策がたてられると思う。絶滅を危惧される稀少生物の保護の大切さと同様に断崖絶壁の武田尾の溪谷美を保全するための対策を議論することは社会環境にとって重要なテーマだと思う。自然度の高い多自然型の川は水辺の魅力に富み多くの市民の心を引きつけるだろう。川のゴミを拾うのではなくゴミを捨てられないような優しく美しい川づくり、そして夏休みには子どもの喚声が聞こえるような川の社会環境が望まれる。